

発表題目：

ウガンダ北部ウェスト・ナイルにおける新たな生計手段の模索—労働移住と交通網に着目して—

所属： 龍谷大学／京都大学

氏名： 山崎 暢子

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表では、ウガンダ北部のウェスト・ナイル準地域（以下、ウェスト・ナイル）における人びとが、従来の農業や南部への出稼ぎに加えて新たな生計手段を模索し実践している現状について、とくに首都圏および近隣諸国の主要地方都市と接続する舗装道路の拡張との関連に着目して報告する。

ウガンダの他地域に比べると後の時期になってからイギリスの保護領下に組み込まれたウェスト・ナイルには、人頭税を納めるための現金収入源となる換金作物の栽培や、賃金労働の機会が限定されていた。このため、ウェスト・ナイルを含むウガンダ北部地域からは、中央部や南部における大規模なプランテーションでの肉体労働に従事する者、兵士や警察官として登用される者が、出稼ぎのための移住を経験した。労働力の供給地としてみなされた北部と、その就労先の地域である中央部や南部とのあいだに、植民地期から独立後にかけて社会経済的な格差が構造的に生成されてきたことについてはこれまで指摘されてきた一方で、ウガンダ北部の出稼ぎ労働者の生活そのものについては必ずしも明らかにされていない点が少なくない。そこでまず、植民地期を経て 1962 年の独立以降から 2020 年代に至るまでの地域の交通網の整備と人びとの移動手手段の変遷とを概観しつつ、出稼ぎ労働者らがどのように移動を経験していたのかを資料から読み解く。ここでおもに取り上げるのは、Richards, A. (1954) らによる *Economic Development and Tribal Change: A Study of Immigrant Labour in Buganda* (Cambridge: W. Heffer & Sons Ltd) である。また、実際に出稼ぎ労働を経験したウェスト・ナイル出身者とその親族、出稼ぎをすることなく地域に留まった人びとの生活について当事者の語りも分析する。

次に、独立後から 2000 年代なかばまでのウガンダおよびスーダン南部と DRC (ザイール) 北東部情勢の影響およびウガンダ国内の治安の不安定化によって、ウェスト・ナイルと首都圏とを結ぶ道路網の寸断など、人びとの移動の制約要因について検討する。南部に大規模なサトウキビプランテーションを有する企業の採用地でのインタビューからは、とりわけ戦火の激しかった 1970 年代後半から 1980 年代にかけて南部への出稼ぎ労働が一時中断されていたことが明らかになった。

2010 年代以降になりウェスト・ナイルでは急速な都市開発が進められているが、この開発の背景には、2021 年で三期目となる国家レベルでの開発事業、アフリカ開発銀行などの支援による全天候型市場の建設、2013 年以降の南スーダンからの難民のウガンダへの流入に伴う支援などが関係している。首都圏はもとよりスーダン南部や DRC をはじめケニアやタンザニア、ルワンダと繋がる舗装道路の整備によって飛躍的にアクセスが増えたウェスト・ナイルには、首都圏からも労働者が流入するという、これまでになかった現象もみられている。発表の最後ではウガンダ国内における「移動」に変化が生じつつある点、それにとまなう生計手段の多様化の可能性について指摘する。

参考文献) アーリ, ジョン. 2015. 『モビリティーズ』吉原直樹・伊藤嘉高訳, 作品社.